

# 災害大国

## ドカ雪で立ち往生 防ぐには

近年、頻発する「ドカ雪」で、多数の車が巻き込まれる立ち往生が相次ぐ。長時間にわたって車中に閉じ込められると、命にもかかわりかねない。この冬、新たな取り組みが始まった。

▼特集面Ⅱ雪害に備えを

### 車内に排ガス「怖い」

昨年12月半ば。新潟県内は山沿いを中心に雪が降り続いていた。

同月16日午後2時ごろ、トラックの運転手になって5年目だった男性(27)は、新潟市内で5トトラックに酒類を2ト積んだ。翌朝、群馬県高崎市内で荷を下ろす予定だった。

「異常な降り方だな」午後8時前、関越道に入ると、渋滞が始まった。「そのうち動きたろう」。当初は焦りはなかった。しかし、4時間、8時間と経っても動く気がない。

トラック後部にあるマフラーの排気口が積もった雪で塞がれば、車内に排ガスが入り、一酸化炭素中毒になりかねない。何度も車を降り、雪の量を確認した。

一般車は車体が低い。運転席で見ていると、深夜、前の一般車の後部ガラスから大量の雪が落ちて、マフラーを塞いだ。慌てて飛び出し、雪をどけてあげた。

「空腹は我慢できるけど、(一酸化炭素中毒は)本当に怖い」

18日朝に自衛隊が到着。雪かきが進み、同日午後4時ごろに動き出した。立ち往生に巻き込まれてから、約44時間

が過ぎていた。

立ち往生した車は上下線あわせて最大約2千台。東日本高速道路によると、死者はいなかったが、体調不良を訴えて救急搬送された人もいた。

2013年に北海道中標津町で、雪に埋もれた車から一酸化炭素中毒とみられる4人が遺体で見つかった例もある。

関越道の立ち往生から約3週間。今年1月、今度は北陸道で約1600台が大雪で立

ち往生した。

福井市内の運送会社「北陸トラック運送」は、18年2月の豪雪時に輸送を断りきれずに車両を走らせ、身動きがとれなくなる車が相次いだ経験から、警報級の大雪時は輸送しないと主な顧客と決めていた。それでもやはり、品薄に備えたいチェーン店などに納品を強く求められたという。

タイヤが雪にはまったトラックや車が道路を塞いでいる現状を社員が撮影。LINEで送り、配送できないことを示した。「頼まれれば『運べません』とは言いつらいが、無理をしても納品できない」と同社取締役の永岡和孝さん。「大雪のときは道路が止まる」という意識が広がってほしい」

### 計画的に通行止め

気象庁の長期予報によると、この冬は、特に西日本の日本海側で雪が多くなる可能性が高い。高速道路各社は、除雪車の増強など大雪への備えを進める。

11月中旬、新潟県湯沢町内の関越道「大丈夫?」人数は?

雪上バギーが車の間をすり抜け、ドライバーに食料などを渡していく。東日本高速道路新潟支社や県などが、約500台が立ち往生したという想定で訓練を実施した。

中央分離帯に仮設の橋を設け、トイレや電源がある一時避難用バスがとまった対向車

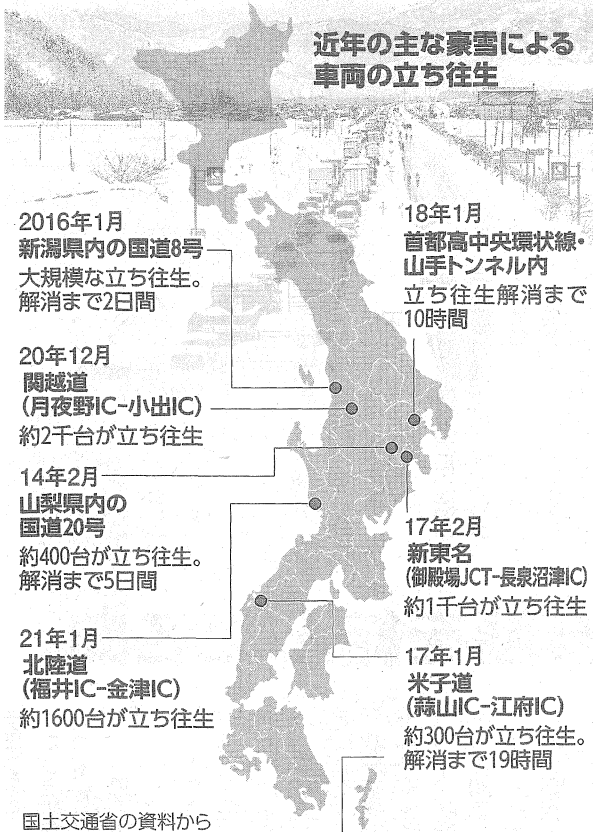
線まで、徒歩で誘導する手順も確認した。

今冬からは、新たな立ち往生防止策も始まる。

国土交通省は3月に大雪対策の指針を改定。「人命が最優先」として道路上の立ち往生を徹底的に避ける方針を打ち出した。

これを受け、高速道路各社は大雪が予想される場合、日時や区間を事前に周知し、計画的な通行止めを実施する。国土交通省も、できるだけ避けてきた高速道と並行する国道の同時通行止めも、ためらわな

### 近年の主な豪雪による車両の立ち往生



休」に近いイメージで、外出自体の自粛も求める。

雪害に詳しい長岡技術科学大の上村靖司教授は「通行止めは、空振りを恐れないことが重要だ」と指摘。物流が滞ることも想定されるが、「消費者である我々も、寛容にならない

ことはいけません」と話す。

気象庁気象研究所の川瀬宏明主任研究官によると、地球温暖化で雪は減ると予測される一方、気温や海水温の上昇で大気中の水蒸気量が増えることで、地域によっては極端な大雪が増える可能性があるという。(東谷晃平、堀川啓元)